



Title	Joseph Andrews における実例と教訓
Author(s)	武田, 雅史
Citation	Osaka Literary Review. 1993, 32, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25451">https://doi.org/10.18910/25451</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## Joseph Andrews における実例と教訓

武田 雅史

Henry Fielding は新領域の文学創作を着手するにあたり、それを自ら「喜劇的散文叙事詩 (comic epic poem in prose)」と命名した。彼の最初の小説 *Joseph Andrews* 中に、模範とすべき伝記作品の特徴として “Delight is mixed with Instruction, and the Reader is almost as much improved as entertained” (18)<sup>1)</sup> が挙げられていることから Fielding が作品において「娯楽」と「教訓」を目的としたことは確かである。

*Joseph Andrews* の冒頭の文章に、“It is a trite but true Observation, that Examples work more forcibly on the Mind than Precepts” とある。口先だけの教訓よりも、生きた模範が心に深い感銘を与えるという真理の宣言である。実在する善人は限られた周囲の者にしかよい実例としての影響を及ぼすことが出来ないのに対し、伝記によって作者は善人の模範を万人に広めることが可能だとして、語り手は古今の優れた伝記を列举する。次に Coley Cibber の『自叙伝』と並び風刺的に挙げられた、優れた有徳の女性の生きた模範の提示は、先に Richardson が書簡体により余すところなく行なっていたが、Fielding においては、実例と読者との間に語り手の存在を介入させることにより、「実例」の提示と共に、語り手の読者に向けた「教訓」的解説が混ぜ合わされている。これが Fielding が敢えて採用した方法であり、Pamela の行動を逐一真に受けて恐怖に震え感涙にむせぶ読者に疑問を抱いたがゆえであった。笑い、そして風刺の源泉を「見かけ」と「真実」の相違に見出した Fielding は、*Joseph Andrews* の序文において、“The only Source of the true Ridiculous. . . is Affectation” (7)、“Affectation proceeds from one of these two Causes, Vanity, or

Hypocrisy” (8) と述べている。言動と内面の矛盾は笑いを誘うものであると同時に、より深刻には、人を惑わし欺くものである。この危険を回避するため、Fielding は登場人物の行動描写に加えて、読者の誤読を正すための教訓的解説の手段として語り手を機能させた。さらに Fielding の語り手は、物語の解説者であると同時に、作品の規範を受容する読者の能力を試す任務も与えられている。<sup>2)</sup>

本論では、*Joseph Andrews* において、Fielding が「事例」と「教訓」という2つの要素をいかに結びつけ、語り手の描写と解説が織り成す texture から、物語を越えた次元で語り手－読者関係での伝達行為が行われ、作品の規範を読者が実践する過程を考察してみたい。なお、事例 (example) とは、登場人物の言葉、行動、また出来事の描写を指し、教訓 (precept) とは、語り手が物語内容の解説、作品自体に対する自意識的な解説において読者に向けた説明、解釈、一般化の言説とし、最終的に読者が作品から得る教訓 (instruction) とは区別する。

第1巻中のロンドン邸での Lady Booby と Slipslop による Joseph 誘惑の場面は、内面と外面の相違の物語的伝達、人物描写の設定と解説と解説の方法を明示している。最初に、夫人の Joseph 誘惑、次に Slipslop の Joseph 誘惑が、それぞれ1対1の場面で行われ、次に後者を部屋に呼んでの女性2人の会話が続き、語り手の解説の後に、再び夫人と Joseph との対話があり、これを Slipslop は鍵穴から盗み聞きし、秘密を知り精神的優位に立った Slipslop と夫人との対話が続いて提示される。読者は、語り手の逐次的な説明による彼女等の内面の理解をもとに、見せかけの態度、状況に応じたその変化から、虚栄と偽善を読み取ることが可能となる。この一連の場面の中間にはさまれる語り手の解説は次のものである。

It is the Observation of some antient Sage, whose Name I have forgot, that Passions operate differently on the human Mind, as Diseases on the Body, in proportion to the Strength or Weakness,

Soundness or Rottenness of the one and the other.

We hope therefore, a judicious Reader will give himself some Pains to observe, what we have so greatly laboured to describe, the different Operations of this Passion of Love in the gentle and cultivated Mind of the Lady *Booby*, from those which it effected in the less polished and coarser Disposition of Mrs. *Slipslop*.

Another Philosopher, whose Name also at present escapes my Memory, hath somewhere said, that Resolutions taken in the Absence of the beloved Object are very apt to vanish in its Presence . . . . (34)

さらにこの後にある “on both which wise Sayings the following Chapter may serve as a Comment” (34) という表現は、後に続く 2 人の女性人物の描写が、この 2 つの金言に対する注釈の役目を果たすことを示す。冒頭で「実例は教訓に勝る」と述べた語り手が、ここでは明らかに先哲の格言を主に、人物描写を従に扱っているように見える。小説の他の多くの箇所を見ても分かるように、語り手は実例としての物語を眼目として語っているとは言え、語り手の教訓めいた言説は随所に現れる。伝記作家を任じて実例を提示するとしても、出来事、人物を語る際に、語り手の特定の視点、価値観が介入するのは免れないことであるが、Fielding の場合は、登場人物の動機を説明する上で、その正当化の根拠を、過去の賢人、文学中の格言、また作者の人間性観察に基づく見解に求めている。人物の動機を説明する上で、そうした一般化による説明を行い、読者の内に納得によるもっともらしさを実現することが、Ian Watt の言った “realism of assessment” の重要な要素であると言える。<sup>3)</sup>

だが、語り手を信頼して、その指示通りに読み進む「賢明な読者」が、情欲と虚栄と狡猾さにまみれた 2 女性の振舞いの相違を骨折って観察することに落とし穴はないだろうか。加えて、女性の誘惑から「男子の貞操」を頑固に守り通す Joseph は、Pamela のパロディーであり、風刺の対象、滑稽

の一事例としか見えないが、後述するように物語構造と語り手により、全く別の意義が付与される。Joseph は、姉 Pamela と Adams 牧師の忠告や説教を頑なに貫き通し、純潔を守り抜く姿が描かれ、それ自体は反 Pamela 的な意味合いを帯びて実に滑稽なものに映るが、その Joseph の態度は、この世で一番愛する Fanny がいるという事実が後に明らかになることによって、全く違った真実味を帯びることになる。さらに、Joseph は、後述する Adams や他の登場人物とは違い、教えられた教訓を忠実に実践している。馭者、女中 Betty など、欠点を持った人物が、口先であれこれ言うことなく、慈善的行為を実践するのが描かれるように、単なる知識ではなくその実践の重要性が、空虚な議論や教訓と対照的に提示されることになる。

Joseph がロンドンの邸宅から追放されて、Booby 邸のある田舎へと向かって旅を開始する個所が、この小説のターニングポイントである。Richardson のパロディーから Fielding 独自のパノラミックな社会を描く小説世界へと転換する部分でもあるが、それは前後のエピソードの対比によっても明らかである。密室内での男女間の誘惑を描く個人レベルの貞操の美德から、広く社会内での慈善の美德へと主題が一変する。Joseph が一人旅に出て間もなく盗賊に襲われ、有名な乗り合い馬車の場面となる。しかし、主題となる美德が変わっても、Fielding の筆致は変わらない。<sup>4)</sup> 読者は、Lady Booby, Slipslop に向けた同じ目で、瀕死の重傷を負った Joseph の同乗を様々な動機から拒否する乗客達を見る。

Joseph が宿場に運び込まれ、主である Tow-ouse 夫妻、女中 Betty の Joseph に対する態度、さらに、Adams、Fanny が加わり旅を続ける間に、金に困る三人が出会う人物達の態度に慈善性が問われてゆく。特に2巻14章から17章の一連の出来事は慈善をめぐる「事例」の好例である。Adams が Trulliber 牧師と慈善観について大議論を繰り広げた後、結局、借金の申し出を拒絶され、途方に暮れたところを、宿に偶然居合わせた行商人が快く三人の旅費の足しを提供する。次に路上で出会った偽紳士に食事と宿を勧められ、Adams は将来の地位と給料まで約束され有頂天になるが、

翌日、その詐欺師は姿を消し、とても払えぬ宿代を亭主は仕方のないことと帳消しにして、さらに三人に酒を振舞う。物語の構造として、Trulliber と偽紳士との場面が大きなスペースを占めそのいずれの結果の苦境も急転回する形であっさりと救われる。これは Fielding が物語構造のパターンによってアイロニーを確立する常套手段である。喜劇的逆転によるプロットの展開と同時に、登場人物を犠牲にしたアイロニーが達成される。

この小説で、中心人物となるのは、Joseph よりも Adams 牧師であるとも言ってよいが、宗教、古典文学、外国語に造詣が深く、一方、世間知の点では赤子ほどのものしかない、説教癖の旺盛な Adams の口を通して様々な議論が物語中に語られる。3巻11章の章題には“*calculated for the Instruction and Improvement of the Reader*”の語句があり、Fanny が庄屋の一味に連れ去られ、彼女を失って嘆く Joseph に、Adams が理性によって嘆きを克服するのがキリスト教徒の義務であると説く長い説教が収録される。だが、4巻8章で、子供が川で溺れたという知らせを聞くやいなや嘆き悲しみ、Joseph の慰めにも聞く耳を持たない Adams の姿が描かれる。その他、Barnabas 牧師と外科医との法律上の議論、獵師の勇気論、Trulliber 牧師の慈善論からも、物語中で人物の説く議論が、いかに実践とは無縁の虚しい口先だけのもので、虚栄のための手段であり、偽善的に語られているかが示されている。物語において、登場人物の一見もっともらしい議論、教訓めいた言葉は、概して、教訓のパロディー、机上の空論の虚しさとして暗示される。

語り手も、新たな文学の創作者として、また物語を語る権威者として、自慢めいた発言をすることも少なくないが、自らの脱線に対して自意識的なコメントをする個所がある。“If it was only our present Business to make Similies, we could produce many more to this Purpose: but a Similie (as well as a Word) to the Wise.” (45) さんざん比喩を連発した挙げ句のこの「賢人には比喩1つ、また1語で十分である」という表現で、語り手が自らの語りそのものを揶揄している。物語中の人物の銜学的、自己弁護

的な議論に否定的な意味合いを持たせて提示する一方で、物語を解説する役目である語り手の言説は、自らの脱線、逸脱を楽しんでいる感がある。

また、語り手の解説は、物語内容に対してなされるばかりでなく、作品自体に対する自意識的な語りとしても現れる。第2巻1章では、小説のモチーフである旅と、読む行為を対比させ、この作品を巻と章に分けた理由を、旅人が途上、宿場や酒場で休息をとるように、読者にその都度、目を休めて、読んでいることについて考えを巡らす機会を与えるためだと言っている。これは、*Tom Jones* の「献立表」に始まる各巻導入章に数々見られる手法であるが、常に読者の反応を操作するための試みである。同種の比喩は次の箇所にも見られる。

It is an Observation sometimes made, that to indicate our Idea of a simple Fellow, we say, *He is easily to be seen through*: Nor do I believe it a more improper Denotation of a simple Book. Instead of applying this to any particular Performance, we chuse rather to remark the contrary in this History, where the Scene opens itself by small degrees, and he is a sagacious Reader who can see two Chapters before him.

For this reason, we have not hitherto hinted a Matter which now seems necessary to be explained. . . . (48)

簡単に腹の底が見透かせる単純な人物と、書物との比喩であるが、ここでは、読者の単純な読み方では、この作品の真の理解はほど遠いという警告が読者に発せられている。語り手がこの場所でようやく明らかにしようとする事実とは、前述の Joseph の愛する Fanny という娘の存在である。人間を判断する行為と書物を読む行為とのこの類比は、この作品にも「見かけ」と「真実」があり、物語では人物の内面と外面の相違を解説する語り手の助けがあるが、作品の読みに関しては読者が自ら判断をするべきであることを示すのではないか。Fielding は、物語の提示とは別に、語り手と読者との関係を確立することにより、その手掛りを示した。

最後に、ある真理が、様々に形を変えてテキストの中に現れるのを見ておく。一行から離れて、1人道を進む Adams の描写である。

[He] soon came to a large Water, which filling the whole Road, he saw no Method of passing unless by wading through, which he accordingly did up to his Middle; but was no sooner got to the other Side, than he perceived, if he had looked over the Hedge, he would have found a Foot-Path capable of conducting him without wetting his Shoes. (96)

一見、Adams の常習的な軽率さの失敗のまた一例として気楽に笑える個所であるが、ここに作品の重要点が象徴的に暗示されている。先に Joseph を襲った盗賊が捕えられ、翌日判事の元に連行するため、宿場で警官と若者二人が一晩見張りをした時、細心の注意をしたつもりが、盗賊は窓から逃走する。これに語り手は次のような説明を加える。

human Life. . . very much resembles a Game at *Chess*, for, as in the latter, while a Gamester is too attentive to secure himself very strongly on one side the Board, he is apt to leave an unguarded Opening on the other; so doth it often happen in Life; and so did it happen on this Occasion. . . . (71)

また、Lady Booby の人柄を話題にしている時、夫人の性質を熟知していると自負する Slipslop は、夫人の変貌が理解できないと言う Adams に向かって、“People that don’t see all, often know nothing.” (102) と語るが、「物事の一面のみを見ていてはならない」という同様の趣旨が独善的な Slipslop の口かを通じても聞かれる。Fielding の作品では、善人が欠点を持って描かれ、偽善的人物が真理を語るが、これも一つの物事を異なった角度から見ることを読者に要求する方法である。同じ内容が、語り手の口からも、登場人物の口からも形を変えて語られる。

物事の一面性にのみ目を向けることから生ずる誤解、危険が Fielding の Richardson に対する反発、そして、彼の作品の基盤となっている。人間の



表と裏との相違に敏感であった Fielding には、小説において、それをいかに芸術的に表現するかが問題であった。このインパルスが、物語描写、語り手の解説、作品構造、さらに作品と読者の関係にも拡大してゆく。Fielding の語り手は、事例を説明、解釈、一般化する機能に加えて、物語内容、作品自体、読者に対する言及により、小説の主題を異なった視点から読者に意識させる役割を持つ。

語り手の風刺の目は物語内の人物の語る教訓的議論にも向けられ、人物の言行不一致を描写することにより、口先だけの教訓の虚しさを読者に伝えている。だが、人物を知る上での最大の手掛りである語り手の説明、これによって読者は人物に対して優越感を抱いているわけだが、それが世俗的な気取り、虚栄、偽善に対する知識の増大を誘うものであると気づく時、語り手の教訓めいた言説に読者の疑いが向けられる。ここで読者は語り手に語られるままに登場人物のみを批判的に見ていた自らの態度に気がつくことになる。つまり、語り手は、自らの教訓的言説を、物語を越えた対読者関係において小説の規範の実践の対象にしている。第3巻第1章での作品に対する解説中に、この作品で風刺の対象になった特定の職業に就く者に向けられた言葉がある。そうした人間がこの書物を読む効果とは “to hold the Glass to thousands in their Closets, that they may contemplate their Deformity, and endeavour to reduce it, and thus by suffering private Mortification may avoid public Shame” (189) であるが、これが間接的にすべての読者に向けられていることは明らかである。

物語中の人物、出来事を風刺的に笑いの目で見るのが小説の前景であり、その背景には、他者をいかに見るか、即ち、“we humbly hope his [our Reader’s] Good-nature will rather pity than condemn the Imperfection of human Virtue” (38) に集約される実践的な態度が規範として存在している。表面上、語り手は、徹底的な風刺の姿勢で人物の矛盾を描きながら、読者が語り手の物の見方に盲従し、そうした目でしか人間を見なくなることに読者自身が気がつくように語りを構築している。<sup>5)</sup>

抽象的な道徳的問題と、現実的な日常経験とにいかに関わり合いをつけるか、一般と個別をどう結びつけるかに際して、Fielding はテキスト上に教訓と実例を併置させ、互いを補い合わせる方法をとった。<sup>6)</sup> 眼目である伝記物語、というよりも風刺的物語を提示するばかりでなく、そこに例示、比喩のスペクトラムを駆使して読者の視点の多数化をはかることにより、読者の視野を拡大し、読書活動により読者の見方を変えることをことを目論んだのである。

実例は教訓に勝るという冒頭の文章はアイロニーとして機能する。善人の実例であるはずの Joseph は一見、Pamela のパロディーとして描かれ、物語には虚栄・偽善の人物が数多く描かれる。一方、教訓自体もパロディー化されながら、読者が作品から真の教訓を得るには語り手の教訓的解説が不可欠である。Fielding の風刺は実例と教訓の両者に向けられ、表面上の笑いと滑稽の裏で、人間をいかに見て判断すべきかを読者に問うているのである。

## NOTES

- 1) Henry Fielding, *Joseph Andrews*, ed. Martin C. Battestin (Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1967), p. 18. 以下、本文からの引用はこの版により、ページ数のみを引用末尾に記す。
- 2) *Joseph Andrews* の語り手、読者の活動について論じている研究には、Sheldon Sacks, *Fiction and the Shape of Belief: A Study of Henry Fielding with Glances at Swift, Johnson and Richardson* (The University of Chicago Press, 1964) ; Wolfgang Iser, *The Implied Reader: Patterns in Communication in Prose Fiction From Bunyan to Beckett* (The Johns Hopkins U. Press, 1974), *The Act of Reading: A Theory of Aesthetic Response* (John Hopkins U. Press, 1978); J. Paul Hunter, *Occasional Form: Henry Fielding and the Chains of Circumstance* (Johns Hopkins U. Press, 1975); Raymond Stephanson, "The Education of the Reader in Fielding's *Joseph Andrews*," *Philological Quarterly*, 61 (1982), pp. 243-258. 等がある。
- 3) Ian Watt, *The Rise of the Novel: Studies in Defoe, Richardson and*

*Fielding* (London: The Hogarth Press, 1957), p. 288.

- 4) Sheldon Sacks は、1 巻 1 章において既に語り手が、“serious commentator” と “ironic commentator” の役割を演じ分けることにより、アイロニックなトーンを確立していると述べている。(Sacks, p. 70.)
- 5) 主人公の思慮分別 (Prudence) の獲得がテーマである *Tom Jones* では、語り手が物語を読む読者に対しても細心さを要求し、その能力を試しているが、*Joseph Andrews* においても、そうした物語中の主題と、語り手—読者関係の並行性は見出される。Stephanson は、読者は Fielding が登場人物の気取りを暴露するのを見ることにより、人間の愚行について間接的に修養を積むように望まれるが、読者自身が気取りとは無縁なものと考えていれば、虚栄心を持った偽善的な読者となることを指摘している。(Stephanson, p.244.) また、Iser は、偽善的な登場人物の立場から Adams を見るか、世事に無知で理想的、非現実的な Adams の立場から彼等を見るかの相克に読者の優越感が疑わしくなることを論じている。(Iser, *The Act of Reading*, p. 217.)
- 6) Mckeen は、英国小説がジャンルとして確立する上で、認識論的危機として、物語においていかに真理を語るかという “question of truth” と、社会的倫理的危機として、社会秩序が個人の内面の道徳にいかに関係づけられているかという “question of virtue” に直面し、Fielding は、後者によって前者を例証 (exemplify) する方法をとったと論じている。Michael Mckeen, *The Origin of the English Novel, 1600-1740* (Johns Hopkins U. Press, 1987), p. 20, p. 408 を参照。また、Burns は、*Joseph Andrews* には、方向の定まらない人生の豊かな物語を展開する欲求と、教訓を核に持つ高度に様式化した小説を創作する欲求との葛藤、ジレンマがあるとしている。Bryan Burns, “The Story-telling in *Joseph Andrews*,” in *Henry Fielding: Justice Observed*, ed. K.G. Simpson (London: Vision Press Ltd., 1985), pp. 120-1 を参照。